

# 匿名他者への贈与と想像力の社会学：献血行為の社会学的研究

吉武, 由彩

<https://hdl.handle.net/2324/4474919>

---

出版情報：九州大学, 2020, 博士（人間環境学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 吉武由彩

論 文 名 : 匿名他者への贈与と想像力の社会学——献血行為の社会学的研究

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、匿名他者への贈与がいかになされているのか、その一端を明らかにすることである。日本社会においてはこれまで親族関係や地域関係といった関係性により、人々の生活は支えられてきた。さらに近年では、ボランティア活動に期待が寄せられている。しかし、私たちの生活を支えているものとは、上記のような、担い手と受け手が直接に接点を持つような、顔の見える関係性、あるいは、そのような中で営まれる行為だけではない。献血や寄付・募金といった行為、福祉国家における社会保障制度を思い浮かべるとわかるように、私たちの生活とは、匿名他者との非対面的な関係性によっても支えられている。

現代社会では格差や不平等の増大、グローバル化の進展、家族形態やライフスタイルの変化など、さまざまな領域における異質性や多様性の増大が見受けられる。そのような中、顔の見える他者との社会的連帯だけでなく、見知らぬ他者との社会的連帯も必要になってきている。本研究では、匿名他者との非対面的な関係性によって支えられている行為として、献血を取り上げ、匿名他者への贈与がいかになされているのかを分析した。それにより、対面的な行為としてのボランティア活動の研究がなされることが多かったボランタリー行為の研究の拡張を行うとともに、匿名他者との社会的連帯のあり方を検討した。

本研究では、序章～第3章までが第1部「献血を問うこと」に含まれる。第1部は、本研究の目的や背景の提示、先行研究の整理を行う部分である。序章「匿名他者への贈与と想像力の社会学」では、本研究の目的や背景を提示した。1章「ボランタリー行為研究の動向と献血の位置づけ」では、献血が匿名他者への贈与という特徴を持つことを確認し、匿名他者への贈与は、「想像力」という観点から分析できることを示した。2章「日本における血液事業と献血推進政策」では、血液事業の概要や献血推進政策について確認した。加えて、献血においては、献血者の中でもくり返し献血する「献血を重ねる人々」を増やすことが重要であることを確認し、本研究では、「献血を重ねる人々」を研究対象とすることを述べた。

3章「献血はどのように捉えられてきたか」では、献血研究を整理し、先行研究では、家族や友人など周囲に血液製剤を使用した人（「受血者」）がいることが、献血を促すという報告がなされてきたことを確認した。こうした先行研究とは異なり、本研究では、家族や友人に受血者がいない場合、つまり、「受血者不在」の場合という視座から、こうした人々はなぜ献血をするのか研究を行うことを述べた。なぜなら、周囲に受け手がいることが、ボランタリー行為を促進するという研究に終始してしまうことは、周囲に受け手がない場合も含めたボランタリー行為の広がりについて、十分に考察できていないことにつながるからである。

次に、本研究では、第4章～第6章までが第2部「献血者とは誰か」に含まれる。第2部は、献血の規定要因の分析、献血者の持つ想像力の分析を行う部分である。4章「献血の規定要因分析」

では、男性、高収入層、経営者・役員・正社員、居住年数 0～5 年未満や 10～20 年未満の場合に献血をしやすいことが明らかになった。5 章「多回数献血の規定要因分析」では、献血回数が多い人々は誰なのか分析を行い、男性、高収入層、経営者・役員・正社員、近所づきあいをするあるいはしない場合（近所づきあいをあまりしない場合と比べて）、会食する友人がいないあるいは 11 人以上である場合と報告した。6 章では、多回数献血者を対象とした聞き取り調査から、これらの人々の持つ「想像力」について分析を行った。調査の結果、家族や友人など周囲に受血者がいることが、匿名の受け手への想像力を高め、献血を促すことを示した。

本研究では、第 7 章～第 9 章までが第 3 部「受血者不在の場合の献血動機とは」に含まれる。第 3 部は、家族や友人に受血者がいない献血者への聞き取り調査をもとに、これらの人々の献血動機を分析する部分であり、本研究の中心的な部分である。7 章「受血者不在の場合の献血動機の実態」では、家族や友人に受血者がいない多回数献血者の献血動機の概要を確認した。分析の結果、周囲に献血者などのボランタリー行為の行為者がいる場合や、医療・福祉関係者がいる場合に、献血が促されることがわかった。他方で、初回献血動機について「なんとなく」、「興味本位」、「特にない」と述べる、「消極的献血層（受動的献血層）」も存在した。

8 章「献血を重ねることと互酬性の予期」では、「互酬性の予期」という観点から分析を行った。献血に関する古典的研究に R.Titmuss の『贈与関係論』があり、そこで強調されたのは互酬性の議論である。互酬性には、過去に家族や友人が血液製剤を使用したから献血をするという議論だけでなく、将来血液製剤を使用するかもしれないから献血するという議論（互酬性の予期）も含まれることから、互酬性の予期について分析した。調査の結果、互酬性の予期をめぐって、「ずれ」の存在が確認された。実際には血液製剤は事故や怪我の場合にはあまり使用されないにも関わらず、こうした語りが頻繁に聞かれた。献血者が、血液製剤の使い道について十分に知らないまま、事故や怪我と語る背景には、採血事業者への強い信頼があることがわかった。

9 章「献血を重ねることと生きづらさ」では、「生きづらさ」という観点から献血動機の分析を行った。今回の調査からは、献血者が生きづらさを抱え、それを献血を通して弱めていることが確認された。献血者は、献血回数 50 回などの区切りを目標とし達成することで充実感を得ていること、献血ルームのスタッフからの感謝の言葉を通して必要とされている実感を得ることなどを指摘した。

本研究では、終章が第 4 部「匿名他者への贈与を支えるもの」に含まれる。第 4 部は、全体のまとめと考察を行う部分である。終章「匿名他者への贈与を支えるもの」では、匿名他者への贈与を支えているものとして、相互作用や中間組織の重要性について論じた。本研究の意義は、ボランタリー行為の研究の観点から言えば、先行研究では、行為の担い手と受け手が顔を合わせる中で行われるボランティア活動の研究が多くなされてきたのに対し、匿名他者へのボランタリー行為の実証研究を行ったことである。現代社会との関連で述べると、異質性や多様性の増大とともに、匿名の他者との連帯が必要になってきている中、身近な他者との相互作用の中で匿名他者への想像力が育まれる場合があること、想像力とは時に認識のずれを含みつつも、まさに贈与を支える場合があることを示したことである。